

田村元著
『歌人の行きつけ』

(いりの舎)

上戸の皆さん、斎藤茂吉が佐藤佐太郎と飲んだビヤホールがあると知ったら、一杯やりたくありませんよ。あるいは、大森静佳の行きつけの京都のパン屋さんにも行きたくなりますよ。本著は筆者が国会図書館などに足を運び、歌集、日記、エッセイで確認が取れた、「歌人の行きつけ」を北海道から沖縄にいたるまで紹介している。ただやはり酒にまつわる話が多い。

道の辺に片寄せ敷かれし貝殻をこの夜踏み帰るあやしきまで酔ひて『群鶏』冒頭に宮柊二の二十代の歌が引かれ、佐佐木幸綱が五十代半ばの柊二と焼鳥屋ではつたり出会ったエピソードが紹介されている。傍らには若き頃の高野公彦や奥村晃作もいたそう。

原稿を一つ済ませて夏ゆふべ酒亭「なにわ」に鰻食ひに行く

高野公彦『渾円球』

一仕事終えた後の鰻、どんなに美味しかったか実感のよく伝わる歌だ。皆さんも旅行先、出張先で「歌人の行きつけ」の店に足を運んでみてはいかが。(伊藤 祐楓)

花山周子歌集
『林立』

(本阿弥書店)

そのかみの 人の植えけむ この杉は焼け野原なる この国を 立て直さむと 人々の 願ひを負ひて よく育ち半世紀経り そらみつ 大和の国に育ちすぎ(中略) しきなべて 杉の林立 春来れば 起これる風に 杉山は煙のごとく 杉花粉 立ち上りたり(以下略)

日本全土に生える樹木の約四分の一を占める杉。万葉集の時代から詠われてきた杉を通じて日本という国の姿を捉えようとする異色の第三歌集。

鼻の頭に汗をかきつつ願いとほ遠いところ夏匂いす人間が人間を忘れてゆくような秋の日差しを眼に入れる大海に子供を釣りぬこの子供われが育てん楽しく育てん

大きなテーマを一冊の底に湛えながら、こうした個人的な歌に見られる直感的な感覚を肉体にのせてゆく優れた独創性は紛れもない。三首目の歌は東日本大震災を背景として、哀しくかがやく。(小島 なお)

宮本永子著
『わたしの秀歌散策』

(柊書房)

小式部内侍、斎藤茂吉、天智天皇など、古い年代の歌の鑑賞からはじまる本書冒頭は、歌人・宮本永子のエッセイとしての性格が強い。小式部内侍の歌にある『天立』にまつわる自身の失敗談や、茂吉が作歌した場所を尋ねたこと、旅中、偶然に天智天皇の歌碑を発見した僥倖などを盛り込みつつ、情緒豊かに短歌鑑賞を繰り広げる。

あとがきの言葉を借りるなら、「私の好みによって書き進めた」ために、「取り上げた歌にかなりの片寄りがある」とした前半部分にこそ本書の魅力が詰まっていると思う。自由闊達なエッセイが、宮本永子の鋭い視点や深い感性と読者のそれとを馴染ませる揺籃となつて、続く綿密な鑑賞へと導いてゆく。例えば早川志織の一首

乳児検診 裸の赤子集まればポツティ チエリの絵のひかりの厚さ

この歌を、「触覚的な世界」を持つと評す。ひかりの厚みの表現から、不妊治療も経験した早川の赤子に触れる手の温もりまでを読み取る、これは宮本による短歌(歌人) 礼賛の書である。(梅田 陽介)